



- ①高校3年生の体育祭にて。スポーツや学園祭実行委員など、勉強以外のことも楽しみながら全力で取り組んだ
- ②学生時代はテニスに熱中。団体戦の選手として打ち込んだ
- ③留学中のHEC Parisのマーケティング授業では、プレゼンテーションも日常的に求められる
- ④留学先のフランスでは友人たちと旅行も

真の英語力は 人生で可能性の扉を 大きく開いてくれる

東京大学経済学部4年

山下 莉紗氏（2019年3月まで平岡塾に在籍）

現在、東京大学4年生。これから大学を1年間休学し、世界の主要なビジネス・スクール・ランキングで常にトップレベルに位置する※、フランス・パリの経営大学院と米国・カリフォルニア大学バークレー校に半年ずつ留学する山下莉紗氏。将来は起業も視野に入れつつ、海外で働く夢を持っているという。中高時代のどのような学びが、そうした夢につながっているのか聞いた。

大学の授業を通して
経済学の魅力を発見

——経済学に興味を持ったきっかけと、現在興味を持って学んでいることを教えてください。

大学1年のときに受けた経済学の授業がとても興味深かったことがきっかけです。現在は1930年代のブロック経済が再来したかのように、米中がそれぞれ経済圏を形成しつつありますが、こうした世界のダイナミックな動きを捉えることができる経済学に魅力を感じ、経済学部に進むことにしました。

4年次の今は、2つのゼミで学んでいます。1つは実際に起業するゼミで、私たちのグループではChatGPTなどの生成AI（人工知能）を使って教育成果を可視化することで、教育を効率化するビジネスプランを考えています。もう1つは、国際経済に関する自主ゼミで、各自が関心のある経済トピックを持ち寄り、みんなでディスカッションしながら国際経済に関する理解を深めています。

——海外で働く夢をお持ちだと伺いました。

海外への興味は高1くらいから芽生えてきました。そのきっかけは英語でした。姉や兄の影響で洋楽を聴くようになってから英語が好きになり、単純に英語を使って働きたい、グローバル

ルに活躍したいという気持ちになっていきました。経済学を学んでは、金融関係やコンサルティング、マーケティングなど、グローバル規模で展開されるビジネスの世界で働きたいと強く思うようになりました。そんな夢もあって、9月から、フランスとアメリカに半年ずつ留学することになりました。

人数枠が狭いため、学内選考が大変でしたが、何度も挑戦してやっと留学するチャンスを手に入れることができました。留学は就職してからもできますが、できればフラットな学生の視点で学べるうちに留学しておきたいと考え、卒業を1年間遅らせることにしました。

文法を徹底することで
英語の土台が身につく

——ところで、どうして平岡塾に通うようになったのですか。

姉がとても楽しそうに平岡塾に通っているのを見て、中1から通うことにしました。実はその上の兄と合わせて、兄弟3人とも平岡塾にお世話になり、かつ学生講師として後輩を教えていました。

——実際に通われて、どのような印象を持ちましたか。

中学受験のときに通っていた塾と違って、足をくずして座ってもいい、何か食べながら授業を聞いていてもいいなど、自由

ると、例えばここに助動詞がくるってことは仮定法かな、などと話の方向性、道筋が見えてきますから、リスニングにこそ文法が大切です。ネイティブの授業とテキストを使った授業を組み合わせた平岡塾は、4技能を高いレベルで鍛えることができると思います。

平岡塾の授業なら
受験対策は1年で十分

——平岡塾では、毎年多くの卒業生が東大などの最難関大学に進学しています。早くから大学受験対策を行っているのでしょうか。

実は、平岡塾では大学受験の対策は高3の1年間しかやりません。それまでは、文法事項を繰り返しながら、様々なテキストを使って内容を理解していく授業を淡々と行っています。テストは中高6年間で2回しかなく、自分の実力がどれくらいなのか測る機会もあります。そのため当時は若干不安もありました。しかし、最終的には、文法を固めながら授業と宿題をこなしていくことで、受験英語は楽にクリアできるだけの英語力がついていました。

——実際、受験に際して不安はなかったんですね。

高2の授業で扱うテキストは、デカルトの哲学書や、ジョージ・オーウェルの「アニマルファア

ム」など、海外の名著も多く、その時点で実は受験英語よりもずっと難しい内容を勉強しています。ですから高3になって東大の過去問を解くようになっても、まったく抵抗感なく読み進めることができました。いろいろな種類の英語の文章が読めて楽しいとさえ感じるほどで、平岡塾の友人たちも一緒に同じことを言っていました。

平岡の授業では毎回、最低限の文法事項のエッセンスが盛り込まれたプリントが配られます。そこに自分が間違えやすい点や、気づいたことなどを書き込んでいくことで、オリジナルの辞書、自分だけの参考書ができあがります。受験の直前もそのプリント集を見返しては、自信につなげていました。

やらない後悔よりも
やる後悔を選びたい

——将来のビジョンを教えてください。

まだはつきりしたイメージがあるわけはありませんが、海外で活躍したいという夢が変わることはないと思います。留学先での経験によつては、どんな風に働きたいかが大きく変わるかもしれません。フランスの留学先は経営大学院ですから、ビジネスに関する見識を深められるのではないかと期待していますし、アメリカの大学では、国際



ネイティブ講師による読解レッスンが毎回35～40分間あり、1～3回で読みきる随想・論説・小説等（難易度は大学入学共通テストレベル）から始めて、高校ではデカルト「Discourse on the Method」やラッセル「On Education」の原書も取り上げる

な雰囲気でした。しかし、それは緩さとは異なります。あくまで「やるべきことはやる」という前提の上に成り立つラフさ、といったほうがいいかもしれません。授業もとても楽しく、たとえばリチャード・ネデルコフ先生の授業では、ジャズの音楽を通して英語を学んだりするので、すべてが新鮮に感じられたのを覚えています。

——どのような授業が行われているのでしょうか。

端的に言えば、徹底的に文法を鍛えることで、真の英語力を身につける授業です。私は、英語はパズルのようなものだと考えています。非常に難解な英語の文章も、SVOCを振ったり、修飾関係をはつきりさせたりしながら文章構造を整理していくと、意外と単純なものに分解されて、何が言いたいのかわかってくるからです。その意味で、文法は、一見難しく見えるもの

政治や国際関係について学ぶ予定です。もしかしたら、外資系の企業に入ってMBAの取得を考えるかもしれませんし、起業するかもしれません。いずれにしても、英語が私の人生の扉を開いてくれると思っています。

私のモットーは「やらない後悔よりもやる後悔」です。そのためにはとりあえず行動してみることが大切だと考えています。行動した結果、たとえ思うような成果が得られなかったとしても、そこで学ぶものがあれば、決して失敗にはならないからです。

——最後にこれから中学に入学する子どもたちに向けて、何かメッセージをいただけますか。

英語の勉強が楽しくなるのは、一見難しく思えた英語が分かるようになる瞬間です。分かったと楽しくなりますし、楽しいともっと勉強したいと思うようになります。そのサイクルに入っていくためには、どうしても文法の知識が必要で、平岡塾はそれを可能にしてくれます。また、私は平岡塾で、突き詰める力を養ってもらいました。何度も復習することで、着実に自分のものにしていく、そういう精神力を身につけることができました。中高時代はいろいろな経験をしたいと思います。ぜひみなさんも好きなことをとことん突き詰めて、豊かな学生生活を送ってほしいです。